教師の秘伝

その1

はじめに

秘伝１は、『全員が挙手して主体的に授業に参加できる集団づくり』を目指します。全員が挙手できるようにするのは、全員が集中して授業に取り組めるようにするためです。

全員が挙手できるようにするためには、教師の発問の工夫が大切になります。学級の全員が答えられるような発問で学習を進めていき、最終的に目標を達成できるようにしていきます。また、教え合う、助け合うということも重視します。①分からない子がいたら進んで教えに行く。②分からなかったら、じっとしていないで、進んで教わりに行く。③教師は、教え方を教える。等の指導も大切です。

また、集団が受容的な雰囲気で、どんな発言でも気軽に出せるようになっていなければなりません。間違った発言やどんな発言でも受け入れてもらえるからこそ挙手できるようになります。

児童が個人の問題を抱えていて挙手して発言できない場合もあります。このような場合は年間の見通しを立てて、じっくり個に応じた対応をしていくことが必要になります。

秘伝１は、下記の五つの視点を重視しながら、主体的に学習に参加して、学習内容を確実に理解しながら習得できるようにすることを目指します。

① 学級の全員が挙手できるように発問を工夫する。
② 「気軽」に「安心」してだれでも発言できる雰囲気を作る。
③ 分からないときは、進んで級友に教えてもらえる。（教え合い助け合いがある。）
④ 授業を通して人との関わり方を学ぶ。
⑤ 挙手できない児童には、段階的な働きかけをして、挙手できるようにしていく。

このようにして、基礎的・基本的な知識や技能の確実な習得をめざしていくことが、秘伝２で目指す、思考力・判断力・表現力・創造力・人とかかわる力を養うための基盤をつくることになります。

一人でも置き去りにされてしまっては、何にもなりません。学級の全員が良くなることが大切だという価値観を日々の指導で作り上げていくことも必要です。

秘伝１は、授業をしながら、児童の人間関係作りをするものです。つまり、授業と学級経営を同時にしていく方法です。

根気よく取り組み、児童の変容から、教えることの意義と喜びを感じ取って、プロの教師として自信を持って、実践を積み重ねていってください。

平成２７年１２月１日

川崎市立川崎小学校校長　吉新一之

教師の秘伝
その１

もくじ

第１章　全員が挙手して主体的に授業に参加できる集団づくり・・・P４

P５　１．「全員」挙手は「全員」参加で「全員」よくなる
P６　２．良い集団作りを通して、良い教育をする
P７　３．全員挙手しない授業では？
P８　４．挙手できない・発言できない児童がいるとき

第２章　『全員挙手』のための具体的な手立て・・・P９

P１０　全員が挙手できるようにするための主な流れ
P１１　習得授業の基本的な流れ
P１２　全員挙手のための具体的な手立て

第３章　基本的なルールの徹底・・・P１８

P１９　基本的なルールを徹底します

第４章　教師の働きかけ・・・P22

P２３　１．「全員挙手」の学級づくりに向けた働きかけの具体例
P２５　２．「全員挙手」が当たり前のクラスのための練習
P２９　安心して発言させるために
P３０　秘伝の鍵

第５章　全員挙手する授業づくり・・・P３２

P３３　全員挙手する授業づくり

第６章　質問コーナー・・・P３９

教師の秘伝１

第１章

全員が挙手して主体的に授業に参加できる集団づくりの考え方

教師の秘伝では、授業の形態を以下の２つ授業に分けて考えます。一つめは、秘伝１の基礎的・基本的な知識や技能の『習得』の授業です。２つめは、秘伝２の習得した基礎的・基本的な知識や技能を『活用』する授業です。

秘伝１は、『全員が挙手して主体的に参加できる集団づくり』をするための方法です。みんなで助け合い、教え合い、全員が挙手して学び、基礎的・基本的な知識や技能の習得が確実にできようにしていきます。

日常行われる授業は、大半が秘伝１の習得を中心にしたものとなります。秘伝１は、「教師が発問する→児童が答える」という活動を繰り返したり、「教師が指示や説明をする→児童が活動をする」という学習過程が中心になります。それらの活動に、学級の児童全員が、主体的に取り組むことができるようにする方法を説明しています。

1.『全員』挙手は「全員」参加で「全員」よくなる

普段の授業で、学級の児童全員が挙手できるなんて、本当かなと思うかもしれませんが、やり方次第で必ずできるようになります。「なぜ全員挙手なのか」から説明します。

できる子、できない子、意欲の高い子、意欲の低い子、学級集団の中にいる全員が学びの主体者です。どの活動でも『全員』が取り組めるように条件を整えます。『全員』が「できる」ではなく、まずは『全員』が「参加する」ことが大事です。全ての授業において児童に対する発問は『全員』が挙手できることを前提に工夫していきます。

『全員』挙手は『全員』よくなるに通じます。全員で学習し、支えあって、全員が高まっていくことが大切です。一人でも学習が嫌いになったり、取り組もうとしなかったりしたら、学級はよくならないという『価値観』を教師が作り上げていきます。教師も同様の価値観を持たなければ、この取り組みは成功しません。一人でも置いて行かれてしまったら、本物の「集団」は存在しません。

『全員挙手』するというのは、何のためでしょうか。それは、全員が集中して主体的に学習に参加するためです。

「発問されていることが分かっている」という合図で「挙手」させるのではありません。「発問について、児童が考えついたかどうか」、「きちんと授業に参加できているかどうか」を教師が確認するためです。そして、参加できていない児童に、働きかけをするためです。置き去りにされることなく、みんなが主体的に学ぶ集団づくりのためです。

『全員挙手』は、児童一人一人の学ぶ権利の保障でもあります。

「挙手」できていない児童がいるのに、指名して進めてしまうのは、学ぶ権利を保障していないことになります。考えているのに進められてしまうと挙手できない児童は「もういいや。」とあきらめてしまうかもしれません。集中していなくても授業は進んでいき、「やらなくてもいいや。」と思うかもしれません。教師は人権感覚に敏感になる必要があります。能力などで差別されることのない公平、公正、受容的な集団づくりは、授業を進めることよりも優先です。

2. 良い集団作りを通して、良い教育をする

全員が「挙手」できるようにするためには、良い集団作りをする必要があります。良い集団の中でこそ、自分を出して、しっかり学ぶことができます

私たち教師は、児童の集団を教育していく宿命にあります。そして、児童の人数が多いと、大変だと一般的に思われますが、教師はそれを「プラス面」にできなければなりません。私たちは、「集団を活用」できるすばらしい仕事をしています。その集団づくりが私たちの仕事の中心であり、集団作りができるかどうかが仕事の成否も左右します。よい「集団づくり」をして、個々の児童をよくして、さらに集団がよくなって、個々の児童がさらによくなる「良好な循環」を作り出すことが大切です。

児童の人間関係には常に敏感になり、差別・仲間はずれ・孤立・悪口・暴力・いじめの芽がないか注意することが大切です。そして、さびしい思いをしている児童が１人でもいないように人間関係作りの指導や支援をしていくことが基盤になります。

そこで、一番大切なことは、子ども同士のかかわり合いが学級内でうまくいくようにしていくことです。この子は特別だから仕方がないとあきらめてしまわないことです。

教師が意識すれば、毎日・毎時間の授業で、人権の教育、思いやりの教育、道徳の教育、情操・心情の教育が積み重ねられていきます。

また、良い集団作りをするために、注意されるということは、「それを直せば自分がよくなること」と受け止め、注意されたことに感謝して見直す態度を育てます。注意していやな思いをしないように、常にフォローすることが大切です。トラブルがあったときは、相手を責めるのではなく、まず自分はどうだったか「振り返る」ようにさせます。

その結果、どの子もあたたかく学級集団に受け入れられて、安心して、のびのびと過ごすことができるようになり、「本来の力が十分発揮できるようになります。」これが、まず全員挙手の前提条件となります。

3．全員挙手しない授業では？

もしも「挙手」できないで学習に参加している児童がいたらどうでしょうか。そのままでよいかどうか考えてみましょう。

挙手しない児童は、静かにすわっているだけで、話を聴いていない場合もあります。学習していなくても授業は進んでしまいます。挙手しなくて、「他の児童の発言を聴いているだけ」では、主体的な深まりのある学習はできません。挙手できない児童をそのままにしておく学級では、学びの集団として学力の高まりが期待できません。挙手しなくてもすんでいる授業は、みんなで学んで良くなろうという集団づくりができないと思ったほうが良いでしょう。

授業が児童にとって、話を聞くだけの受け身の場では、楽しくありません。学校生活で一番長いものは授業です。その授業で満たされることがなければ、毎日が苦痛の連続となってしまいます。そうならないためにも、教師の発問は、児童全員が挙手でき、主体的に学習に参加できるようにしなければなりません。進んで挙手して主体的に学べる授業こそが、毎日の児童の喜びへとつながります。

◆教師として心にとめておきたいこと

（１）子どもが分からないのは、その子に分かる教え方をしていないから。

（２）『家庭のせいにしない』何の解決にもならないから。

（３）どの子も学ぶ権利があり、どの子も本当はできるようになりたい。

（４）学校の学びで満たされれば、きびしい家庭環境も乗り越えられる。

（５）塾で習った子や知っている子だけが発言して終わってしまう偏った授業はやらない』

（６）『子どもが問題行動を起こすのは、全員で話し合い認め合い高め合う集団づくりが成立していないから（学校の学びで満たされていないから）』

4. 挙手できない・発言できない児童がいるとき

もしも「挙手」できない児童がいるときは、どうしたらよいでしょうか。全員が挙手できるようにするための手だてを考えていきましょう。

３つの視点から見直しましょう。

１つめの視点　・・・何を言っても受け入れられる集団づくりができているか。

２つめの視点・・・ 教師の発問が、全員発言できるように練られているか。

３つめの視点・・・児童個人に、発言に抵抗がある、恥ずかしがり屋など問題を抱えていないか。

挙手して発言できない児童がいるときは、教師の重要な課題としてあせらずじっくり取り組んでいきます。「周囲の児童とのかかわりから」、「教師の働きかけから」など状態に応じた手立てをとり、まず、安心させることからです。例えば、「手を挙げることを最初の目標にする。」「次は教わったことをそのまま発言する。」など、その子に応じて、いろいろ段階を考え取り組むことが大切です。

一人一人の学ぶ権利を念頭に、その子に応じた段階的な参加の仕方をさせていくことが大切です。発言の苦手な児童が発言したときは、内容に関係なく、意欲などを褒めます。まわりからばかにされたりしないように常にフォローすることを頭に置きます。【その子の気持ち】になることです。

発言に抵抗がある児童には、少しずつ自信を持たせます。最初は、手を挙げるだけもよいのです。前の発言と全く同じ内容でもよいです。近くの人に丸ごと教わったことを発言してもよいです。言おうとして、忘れてしまったら「忘れました。」で終わってもよいです。発言の途中でだれかに代わってもらってもよいです。そして、少しでもこれらができたときは、褒めることフォローすることが大切です。

「前の発言と同じ内容の発言」をしたり、「全て教えてもらったこと」を発言したりしたときでも、本人のその取り組みを大切にして教師が認めることを重ねていくことが、今後の大きな力を発揮することにつながります。だれの発言でも、話し合いで大切にされることが重要です。

第2章

『全員挙手』のための具体的な手立て

全員が挙手できるようにするための主な流れ

全員が発言できるようにしていくためには、教師として何をすればよいか説明していきます。 基本的なこととして受け止め、実態に合う形に変えることも必要な場合もあります。一度始めたら、定着するまで根気よく続けることが大切です。

（１）発問は、常に全員が挙手できることを前提に工夫します。

（２）発問したら、全員が挙手できるまで待ちます。

（３）挙手できない児童に周囲の子が進んで教えに行くようにさせます。

（４）挙手できない児童は、進んで周囲の子に教わりに行くようにさせます。

■「教えること」「教わること」「教え方」を教えるのが教師の役割です。

※教える、教わるためには，自由に立ち歩いて良いことを認めます。分からないまま、じっとして座っているだけでは何の勉強にもなりません。これを徹底することは、先を考えた指導であり、とても重要なことです。発言できない子は、安心させて発言することに慣れることから始めます。

■発言は間違いでも、みんなのプラスになることを徹底して理解させます。

■発言は途中までで、だれかに代わってもらってもよいことを理解させます。

■前の人の発言と全く同じ内容の発言でも、良いということを理解させます。

■何を言っても受け入れ、バカにしない集団づくりを進めます。

※自分の価値観や生活経験が気軽に出せるようにしていくことが大切です。

■児童個人の問題（緘黙等）で発言できないときは、その子に応じたステップを作り、本人と周囲に理解させて、少しの進歩でもみんなで認めながら、根気よく取り組みます。

習得授業の基本的な流れ

基礎的・基本的な知識や技能の「習得」を目的にした授業の基本的な流れを示しました。

教師が発問して、児童が考えて答える活動を繰り返すことが多くなります。そのときの発問が、全員挙手できることを前提にしたものに工夫すること、学習のねらいを達成するとともに、毎時間に子ども同士の人間関係作りをしながら社会性を発達させるための指導を積み重ねましょう。

教師として毎日毎時間の授業で、人とのかかわり方を教えたり、人とかかわることの良さを体験させたりするように努力します。

全員挙手する習得の授業

学　習　問　題

T　発　問　(全員が挙手できるように工夫)

全員が挙手できるまで待ちます。

発言　発言　発言　発言　発言

教師は、児童に教えること、教え方教わること、助け合いを教えます。

T　発　問　(全員が挙手できるように工夫)

全員が挙手できるまで待ちます。

発言　発言　発言　発言　発言

教師は、児童に教えること、教え方教わること、助け合いを教えます。

T　発　問　(全員が挙手できるように工夫)

全員が挙手できるまで待ちます。

発言　発言　発言　発言　発言

教師は、児童に教えること、教え方教わること、助け合いを教えます。

学習のまとめ

定　　着

振　り　返　り

上記の流れに下記のような多様な活動が学習の流れに入ることがありますが、同様に教えること、教わること、教え方、助け合うことを教師は教えます。

T　指示・説明（全員が理解して活動できるように工夫）

多様な学習活動（ ドリル 作文 操作 作業　その他）

教師は、児童に教えること、教え方、教わること、助け合いを教えます。

「全員挙手」のための具体的な手立て

これまで説明してきた手だてを、実際に学級ではどうすればよいか詳しく説明します。

1．出会いを大切にして、先生の考え方を伝えます。

新しい学級編成があって、子ども達と出会ってすぐが効果的です。「この学級は、みんなで助け合って、みんなでよくなる学級にします。」という話を繰り返しします。そして、「一人一人が進んで学習に参加できるようにするためにこの学級では、全員挙手できるようにします。」と全員挙手の意義をしっかりと理解させます。【先生自身の強い思いを伝えることが大切です。】

□新たな出会い、わくわく感・期待感をふくらますような話をします。
□自分は、よくなれるんだという期待感が持てるような雰囲気をつくります。
□助け合うことを一番優先することを伝えます。（受容的な集団）
　級友の様子をすばやく察知して、困っているときは声かけ、優しく助けることが大切だという価値観を、毎日の授業を通して、学級集団に形成していくことも大切です。
□差別は許されないことを毎日伝えます。（受容的な集団）
□注意し合うことの大切さを教えます。（自分たちで活動できる集団）

2. 簡単な発問（全員挙手できる）をして、話し合いの約束の練習を、楽しみながらできるようにします。

■【話し合いのルール】を教えます。楽しく練習します。
（一度教えたら、徹底します。）
『〇〇〇です。』『〇〇〇だと思います。』
『●●さんにつけたしです。理由は〇〇〇〇だからです。例えば〇〇〇〇だからです。』
『●●さんに反対です。理由は〇〇〇〇だからです。例えば〇〇〇〇だからです。』
『●●さんに質問です。どうして〇〇〇〇なのですか。』
■同じ考えや良いと思えるときは、「同じです。」と声を出す。
■〔ハンドサイン〕　質問→人指し指　　付け足し→チョキ
　　普通に手を上げるとき→パー　反対→グー
■発言するときは、聞き手が多くいる方向を向く。（黒板の方向を向くのではない）
■聴くときは、発言する人の方向を向く。
（自分の考え・知識・経験と比べながら聴けるように）

3．相互指名の仕方を教えます。

①立って発言します。②次の人を指名します。③着席します。

次の人の指名は、近くの席の人でも、学級全体の人に聞こえる声の大きさでします。できるだけ多くの人が偏りなく、発言できるように意識して、次の人を指名します。ハンドサインを意識して、次の人にどんなことを期待するかで指名するようにします。常に相互指名ではなく、先生が優先することを確認しておくことが必要です。

4．間違うことも、学習ではプラスになることを教えます。

簡単な発問（例えば１＋２＝）をして、まず全員挙手させます。そのとき、「これは練習です。全員手を挙げてください。」など働きかけます。わざと間違ってもらう場面を作ります。そして、次に正解を発言してもらいます。そのとき、前の間違いは、あとの人にとって、プラスになるかマイナスになるか考えさせます。当然前の間違いは、プラスになると確認します。もっとわかりやすくするには、三択などでもよいと思います。

「まちがってもよい。まちがいは次への一歩となる。」「分からないことは恥ずかしくない。」「疑問を出すことはすばらしい」という価値観を学級につくることが大切です。

5．話の聴き方を教えます。

話す人がもっと話したくなるような『聴き方上手な集団』づくりに力を入れることも大切です。優れた聞き手が、優れた話し手を育てることができます。話す人がもっと話したくなるような、聴き方を定着させましょう。

《具体的な手立て》

①話し手の目を見て聴く。
②うなずく。（動作があってもよい）
③「あいづち」を必ず声に出す。

①～③を徹底させていくことです。とても重要なことですので、教師が見本を示しながら、辛抱強く取り組んで、定着させましょう。

具　体　的　な　手　立　て

6．全員が挙手できる発問を工夫します。

学級の児童全員が答えられる発問を考え、最終的に学習のねらいが達成できるように教材研究を深めます。

基礎的・基本的知識技能の習得の授業では、発問を検討し、全員が発言できるように毎日・毎時間工夫します。

7．全員が理解して学習できるように、指示や働きかけを明確にします。

毎日の全ての学習活動に、クラスの『全員』が取り組めることを前提にした条件を整えます。

指示や働きかけは、具体的・簡潔にして、全員が理解できるようにしましょう。
教師の話は「短く、無駄なく」が大切です。

8．発問したら、全員手を挙げるまで待ちます。（特別に配慮が必要な子を除く）

まず、みんなが挙手するまで『待つ』ことです。

①挙手できない児童がいるときは、「立ち歩いてもよいので教えてあげてください。」と全体の前で働きかけます。

②教えた子を必ず褒めます。
【助け合いの大切さを具体的な場面を通して理解させます】

③「分からないときは、立ち歩いてもよいのでなるべく自分から教えてもらいに行くようにしてください。」と全体の前で働きかけます。

④分からないことを、分かるまで「分からない」と言える学級の雰囲気を作ります。

⑤「間違って当たり前だと思って。途中で分からなくなったら、それでもいいです。」などと常にフォローすることを忘れないようにします。

9.『教えることも大切な勉強』であることを教えます。

自分が問題をできるだけではなく、分からない子の理解力に応じた教え方ができるようになることが、教える側の児童の深い学びにもつながります。また、論理的に説明していく力をつけることにもつながっていきます。

競争で伸ばそうとするのでは、人間関係も悪くなってしまい、最終的には学力の向上も、期待するほどにはなりません。教えてもらったり、教えたりすることで、人とのかかわりやみんなで学ぶことの大切さも学んでいき、学力も向上していきます。

10.『挙手できない児童』がいる場合は、その原因を探り、改善していきます。

〔1〕児童個人の問題で発言できない場合

■ 原因を探りその子に応じた方法でじっくり取り組みます。

恥ずかしい。まちがったらいやだ。社会性の未発達。緘黙。わからないから発言できない。集中してなくても通ってきた。

〔2〕集団が受容的でないため発言できない場合

■ 受容的な集団作りを最優先で取り組みます。

まちがいをばかにされる学級の雰囲気がある。間違いをばかにする児童がいる。人の失敗を笑う雰囲気がある。後で何か言う児童がいる。

〔3〕先生のかかわり方の問題で発言できない場合

■ 教師の姿勢を改めます。

正答を求めすぎる。間違いも学習という「価値観」が伝わっていない。挙手できない児童がいても、授業を進めてしまう。教え合うこと、助け合うことの大切さを教えていない。

具　体　的　な　手　立　て

11．集中できていない子を見過ごさない。

一人でも集中できていない子がいたら、その場で授業を止めて、児童の前に移動して、確実に集中させるようにしてから、学習を再開します。年度当初は、特に見過ごさないことに留意する必要があります。学習を進めることに集中して、見過ごすことが積み重なっていくと、学級崩壊にもつながっていきます。このことは、真剣に取り組みましょう。

12．分からない子は、近くの子に教わるように促します。（全員が挙手できるまで待ちま

教師も『挙手』できるように支援します。

（教師が働きかけなければ挙手できない子もいます。）

分からなくて挙手できない児童がいるとき、先生が個別指導するので はなく、級友が教えるように促したり、教わりに行くように促したり することが大切です。また、先生は、教えている児童に教え方を教えることも必要になってきます。

13．分からない子は、近くの子に教わるように促します。（全員が挙手できるまで待ちます）

級友のためになる「あたたかい関わり方をしようとする雰囲気が大切です。

14．主体的な学習ができるようにします。

課題に対する学習が終わったら、他の人を教える、教える人がいない ときは、自分に必要な学習を自分で判断して進められるようにする指導します。これを定着させることが、今後の主体的に学べる学級集団づくりに大きく影響します。

第3章

基本的なルールの徹底

第２章では、実現するための手立てを説明してきました。それらが着実に定着し始めているか、その他大切なことが定着しているか、確かめるためのチェックシートです。できていない部分を 発見して、取り組みを見直して、確実に定着させていきましょう。

基本的なルール

発言を聴くとき

□声を出して、うなずきながら聴く。
□発言しようとする級友の方向を向く。

□級友の発言を、理解しようとして集中して聴く。級友の発言が聞こえないとき，優しくもう一度発言できるように促す。

□級友の発言が自分と同じとき，「同じです。」と言う。

□級友の発言で意味の分からないところは，そのままにしないで質問する。

□級友の発言を，「〇〇さんにつけたし」，「〇〇さんに反対」などでつなげる。

発言するとき

□児童は、自分の考えを気軽に発言する。

□級友が多くいる方向を向いて，発言する。

□学級全体に聞こえる声の大きさで発言する。

□「付け足しです。反対です。質問です。」と意見のつながりを意識する。

□「理由は～だからです。例えば～だからです。」と根拠や例を挙げ説明する。

□〇と〇と〇から、こういうことが言えますなど、論理的思考をする。

話し合いを進めるとき

□間違ってもはずかしくない、なんでも言える雰囲気がある。

□自然に相談し合う。（自信がないとき近くの人に聞く）

□分からないときは教わろうとしているか。分からない子に教えようとしている。

□騒しくなったり、ふざけたりする児童がいるとき、注意し合う。

□相互指名で話し合う。(必要に応じて教師も指名する)
□自分の考えを伝えるため、色々な用具を使ったり、色々な方法をとったりする。

を 徹 底 し ま す

話し合いを進めるとき

□先生が不在でも，朝の会・帰りの会を時間になったら始める。

□自分の学習が終わったら，指示されなくても必要な学習を判断して進める。

□先生が不在でも，授業時間になったら自分達で学習を進める。

□分からない子に進んで教えに行くことができる。

□分からないときは、そのままにしないで、自分から級友に教わるために動ける。

□助け合うことができる

□支える・慰めることができる

□相手を思って、注意することができる

□注意されたら、素直に受け入れることができる

□人とのトラブルがあったとき、自分に悪い点がなかったか振り返ることができる。

□良い言動を認め、褒め合うことができ

□自分たちで静かにできる□自分の課題が終わったら、

①人に教える。→②自分で判断して自分の学習ができる

□差別・仲間はずれ・暴力などの言動をクラスで許さない雰囲気がある

□話し合いで「折り合いをつけ」まとまることができる

第4章

教師の働きかけ

　あくまでも一つの例として捉えてください。ここから大切なことを読み取って、担当学年に応じて自分なりの実践に役立てていただくためのものです。

1.「全員挙手」の学級づくりに

あくまでも一つの例として捉えてください。ここから大切なことを読み取って、担当学年に応じて自分なりの実践に役立てていただくためのものです。

1．出会いを大切にする（教師の話の例）

「新しい友達や教室、先生と出会いましたね。今日からみんなは、この学級で一年間過ごします。

最初に、大切にしてほしいことを話します。まず、一番大切にするのは、助け合いです。困っている人が一人でもいたら、そのままにしないで、みんなで助け合いましょう。そして、どの子もよくなる学級作りをします。」

「授業では、『全員が手を挙げて』がんばれる学級にします。そして、たくさんの発言が出るようにして、しっかりとした学習ができるようにしていきます。今日の出会いを大切にして、これまでの自分をよりよくしていけるようにしていきます。」

「助け合ったり、教え合ったり、支え合ったりして、だれもが安心してのびのびと過ごせる学級にしていきましょう。一人でも、ばかにされたりさびしい思いをしたりしている人がいたら、よい学級やよい人にみんなはなりません。みんながよくなるように助け合っていきましょう。この出会いで、必ず全員良くなれます。」

2．助け合いを重視するために（教師の話の例）

「生活をしていく中でこまっている人がいたら助けることを優先してください。自分だけ良ければいいという考えをもっている人は、その考えを捨ててください。この学級では、その考えは通しません。みんながよくなれるようにしなければなりません。」

「学習中でも、手を挙げられずに困っている人がいたら、進んで教えに行ってください。先生は待っていますので、助け合いを優先してください。」

「どんな小さなことでも助け合いが大切です。少しでも困っているかなと思ったら、進んで助けようとして手伝ってみることです。そういう人が学級にいっぱいいたらだれでも安心して過ごせます。例えば、誰かが物を落としたら、近くの人は一緒に拾ってあげるということです。」

（近くの子が進んで助ける場面を実際にやってもらい、具体的に確認すると良いです。そして、進んで拾ったところを褒めます。）

３．間違えてもよいことを教える（教師の話の例）

「間違うことが、恥ずかしいことではなく、プラスになるということをお話しします。まちがったらいやだな、はずかしいなと思って、発言しないと自分の本当の力を出すことができません。そして、本当の必要な力をつけることができません。このクラスでは、安心して堂々とまちがうことができるクラスにします。間違いをばかにする人は、学習することの意味を知らない人です。人がよくなることをじゃまする人です。そのようなことは、この学級では、絶対しないようにしましょう。」

「では、実際の場面で、間違いでもプラスになるということをやってみます。（黒板に書いていきます。）この中から空を飛ぶ生き物を選んでください。〔犬・カタツムリ・鳥〕どれでしょうか？はい手を挙げてください。手が何人か挙がったら、だれかわざと間違えてくれる人と聞きます。了解した子を指名して、わざと違う答えを（犬かカタツムリ）言ってもらいます。」

「ここで、わざと間違えてもらいましたが、間違って困ることは何かありますか？何にも困らないですね。じゃプラスになる面はありますか？１つ間違えれば、のこり２つのうちどれかになるので、分かりやすくなります。だから間違いは、みんなにとってプラスになります。間違いは、はずかしいことではなく、みんなが分かるということにつながります。このクラスでは、間違うことを気にしないことにしましょう。」

1．発言の仕方の練習

発言するときの練習をします。黒板に書くか、貼り付けて説明します。そして、実際にやってみましょう。1＋1でやってみたいと思います。（難しい問題だけど、全員手を挙げられるかな）と冗談でも言いながら、気軽な雰囲気で進めます。

（教師）「1＋1 は、と先生が言ったら、ここで手を挙げます。間違ってもいいんだから、みんな手　を挙げてくださいね。」

（教師）「全員が手を挙げたら、ここで当てますね。『〇〇さん。』と当てられたら。立ってクラスの多くの人がいる方向を向いて答えてください。」

（教師）「聞く人は、話す人の顔を見て、聞いていてください。」

（教師）「自分と同じ考えのときは、同じですと答えてください。」

（教師）「ではやってみます。1＋1 は？」

（児童）挙手

（教師）※より多くの子が手を挙げるまで待ちます。

（教師）「〇〇さん。」「人が多くいる方を向いてから発言してください。」

（教師）「このとき、みんなは発言する人の顔を見てください。」

（児童）「２です。」

（児童）「同じです。」

（教師）「とてもよくできました。ありがとう。」同じ時は、こうなりますね。では違うとき はどうなるでしょうか。声を出さず、ハンドサインで、グーかチョキが出ているはずです。間違った人は、次の人をクラスのみんなに聞こえる大きな声で、当ててください。つぎの人を当ててからすわってください。

しっかり声が出ていたら、必ず褒めます。声が小さかったら、声が小さかったので、もう一度と言って、またやります。そして、必ず褒められる場面を作って褒めます。

２．反対の人を当てるときの練習

「わざと間違えてくれる人」

（児童）挙手

（教師）「〇〇さん。」

（児童）「３です。」※多くの子がいる方向を必ず向かせてください。聞き手は、発言する児童の顔を見させてください。

（児童）ハンドサインで（グー）

（教師）「わざと間違ってくれた〇〇さん。次の人を当ててください。」

（児童）挙手

（児童）「〇〇さん。」※席が近くの子を指名するときでも、クラスのみんなに聞こえる大き さが大切なことを理解させてください。

（児童）「２です。」

（教師）「これで終了ですね。」「まちがっても恥ずかしくないでしょ。」

3．質問の仕方の練習

（教師）「質問は授業で深く考えていくためにすごく大切なものです。遠慮なく聞きたいことは質問してください。」

（教師）では、先生に「あなたは家で何番目に起きますか。」と質問されたとします。だれかが「２番目です。」と答えてください。

（教師）「あなたは家で何番目に起きますか。」

（児童）挙手

（教師）「〇〇さん。」

（児童）「２番目です。」

（児童）「同じです。」

※（グー）で挙手している子、（チョキ）で挙手している子がいるかと思いますが、ここではそのままにしておいてよいです。

（教師）「〇〇さんに質問ある人いますか。」（質問だから、人指し指を出して手を上げるんですよね。）

（児童）挙手

（教師）「〇〇さん。」

（児童）「一番早く起きるのはだれですか。」

（児童）「お兄さんです。」

（児童）「同じです。」同じ質問をしたかった児童は、ここで同じですと言うはずです。

（教師）「よくできましたね。」質問はこうすればよいのです。

4．教える・教わる練習

（教師）「みんなが助け合いながら勉強して、みんながよくなることが一番大切なことです。だから全員手を挙げることが、当たり前のクラスにしていきます。そのための練習をしていきます。」

（教師）「では質問します。空を飛ぶ生き物をひとつ言ってください。」

（児童）挙手

（教師）挙手できない児童がいるとき。「手を挙げられなくて困っている人がいます。どうしますか。」

（児童）「待っててあげたほうがいいよ。」「教えてあげたほうがいいよ。」

（教師）「どちらもとても大切なことですね。」「助け合いが優先です。教えに行ってあげてください。」「わからない子、教わりたい子は、自分で教わりに行ってください。」

（教師）全員が挙手できるまで待つ。

（児童）全員挙手

（教師）「〇〇さんたちが教えてくれたから、みんなが手を挙げられたんだね。ありがとう。よかったです。やさしくすることはとても大切ですよ。」

（教師）「〇〇さん。」

（児童）全員挙手

（児童）「〇〇です。」

（児童）「同じです。」

（児童）挙手

ここでは付け足しが多くなるかと思います。そのとき声を出して付け足しと言う子がいますが、認めておきます。最初から細かいことを言って、やる気をなくさせてしまってはなんにもなりません。

しばらく自分たちで、相互指名を続けさせてみてください。その時気づいたことや、①多くの子が挙手するまで待つこと、②発言する子の顔をみること、③大きな声で次の子の指名をすること、④うなずくこと、などについても、やりながら確認すると効果的です。根気よく指導してください。

3．安心して発言させるために

教師の何気ない言葉が子どもにやる気を起こさせたり、やる気をなくさせたりすることがあります。教師としてこんな働きかけをすると、児童によい影響を与えることがありますという例示をしました。

5．安心して発言させるための教師の言葉

「間違ってもいいのですよ。」

「間違っても当たり前と思って、手を挙げてください。」

「手を挙げられない人がいます。すぐに助けに行ってください。」

「途中までの発言でいいのです。誰かに代わってもらえます。頑張って手を挙げてください。」

「発言して分からなくなったり、忘れたりしたら、誰かに代わってもらっていいのですよ。」

「困っている人、わからない人に教えることは大切な勉強ですよ。」

「今のは間違っていたけど、間違いもプラスだし、発言して立派でしたよね。」

秘伝の鍵

その1

教え合うことは、できない子をできるようにすることばかりでなく、人とかかわることの良さと人とかかわる力をつけるためという目的があることを忘れてはなりません。

その2

教える側が、いつも教えていて一方的な優越感を抱いたり、教えてばかりで損をしているなどのマイナス面の意識を持つことがないように、教えることも勉強になること、助け合うことは大切なこと、教えている側を褒めることに留意することが大切です。

その3

教師は個別指導を優先するのではなく、「教えに行くこと」、「教わりに行くこと」、「教え方」を教えることが大切です。

第5章

全員挙手する授業づくり

基礎的・基本的に知識や技能を「習得」させる授業については、最初にすることは、「全員が挙手」できるような発問で構成する授業の流れを作るための教材研究です。

児童にとって簡単な発問にしながらも、自然に学習の目標に達成できるレベルに引き上げていくことができる授業の流れを作ることです。

また、分からないときは、進んで教わるために動く、分からない子に教えるために進んで動くことの大切さを理解させて実践させることも必要です。

全員挙手する

全員が挙手できるような発問の工夫をどうするか例示します。まず、学習のねらいと学習活動を理解します。そして、何よりも大切なのは、自分が分からない児童になったつもりで、どのような手順、働きかけなら理解できるようになるか考えることです。レベルを下げると学びがなくなってしまうと考える必要はありません。分かりやすい活動から、徐々にレベルを上げていくことを考えるのです。難しい授業をしていても分からない子がいたら何にもなりません。全員に理解させ、習得させていくことを常に根気よく目指すことが大切です。

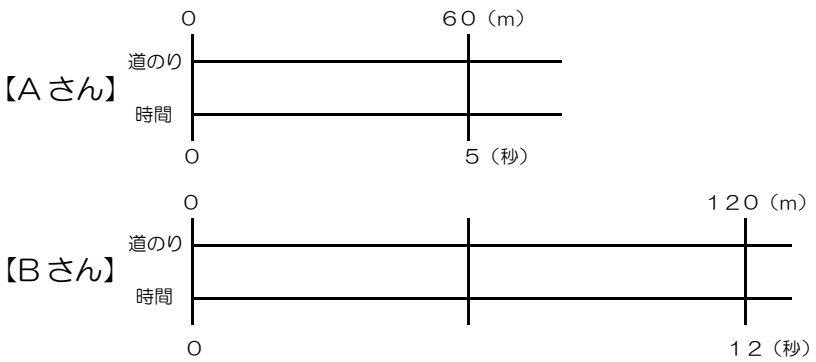
特に、算数などは、教科書の導入問題が難しくなっていることがあります。例えば、速度を求める方法を学習する場合、数字を簡単にすれば、計算で躓く子はいなくなり、意味の理解も容易になります。導入問題が終わってから、教科書の練習問題をいきなりやらせるのではなく、自分の導入した内容に即した練習問題をプリントにしておいて、１００点を取らせて自信を持たせてから、教科書の練習問題をさせるようにすることもたいへん有効な方法です。

6年生 算数科「速さ」速さの意味と求め方

【本時のねらい】① 速さの意味と求め方を理解する。

速さ比べの場面をとおして，単位量あたりの大きさの考えをもとに，速さを比べるしかたを考える。

（教師）では、『６０m を５秒で走るＡさんと、１２０m を１２秒で走るＢさんのどちらが速いと言えるでしょうか。』という問題を考えましょう。



ここでは、だれでも考えやすくするために、図に表します。

（教師）さあ、どちらでしょうか。

(C1) Ａさんだと思います。(児童)同じです。

(C2)どうしてＡさんだと思うのですか。

(C1)説明できないので代わって下さい。

（教師）Ａさんと言っただけでもよかったですよ。

(C1)C3 さん。

(C3)ぼくもＡさんで、わけは、Ｂさんは 120m 走るのに 12 秒で、Ａさんは 60m 走るのに５秒だから、60m を２倍して 120m にすると 10 秒になります。だからＡさんのほうが速いです。

(C4)意味が分からないので、説明してください。

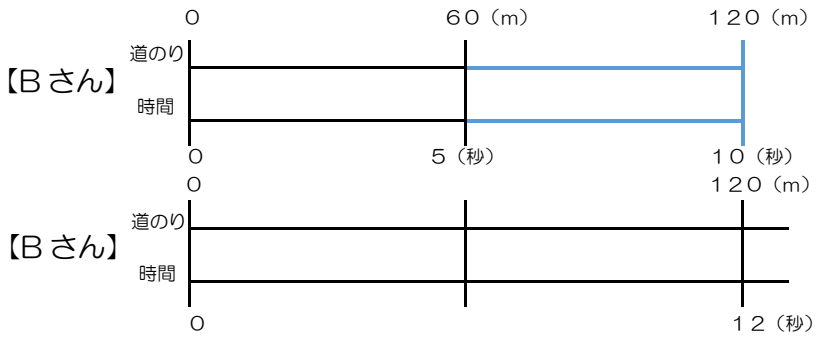
(C4)C5 さん

全員が挙手するまで待つことが大切です。「分からない子がいたら教えてください。」「分からなかったら教わってください。」と働きかけてください。

教えている子がいるときは、少し観察して、教え方についての助言もしましょう。

黒板を使って、図に描いて説明することはたいへんよいことです。分かりやすく説明することも大切なので、大げさに褒めておくと良いです。

(C5)教師の黒板の図で説明します。Ａさんの道のりを２倍するとＢさんと同じ道のり120m になります。Ａさんは 10 秒でＢさんは 12 秒だから、同じ距離をＡさんは短い時間で進めるからです。



道のりをそろえて比較したり時間をそろえて比較したりすることが容易に思いつく問題 にしました。

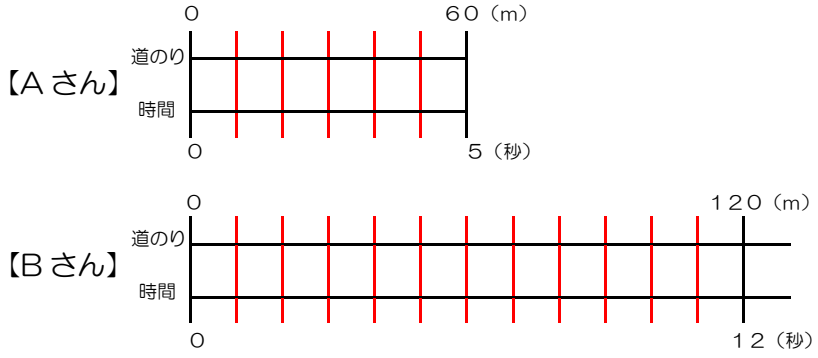
（教師）他の考えはありますか。

(C6)Ａさんは 60÷5 で計算すると、１秒で 12m 進みます。Ｂさんは 120÷12 で計算すると、１秒で 10m 進みます。Ａさんは同じ１秒で２m 長く進むから、Ａさんのほうが速いです。

時間を揃える（この場合は１秒）方法でも比較できることを理解させるための問題です。

(C7)つけたしで、黒板で説明します。Ａさんは５つに区切ったうちの１つ分にするから５で割ればいいし、Ｂさんは 12 でわれば、１秒何ｍ進むか計算できます。

黒板を使用して、自分なりの方法で説明させます。聞き手の反応を確かめながら説明できるように指導していきます。

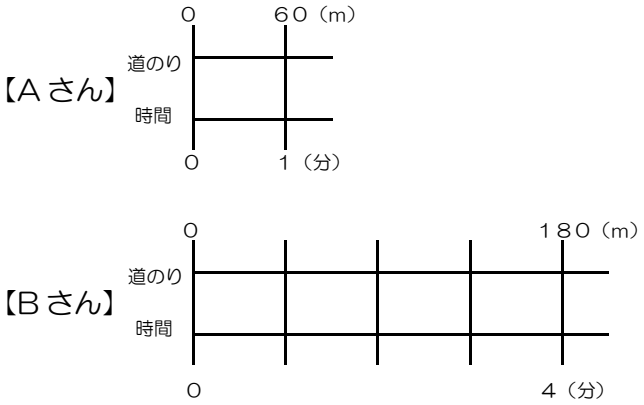


(C8)C7 さんにつけたしで、同じ時間で遠くまで進めるほうが速いと思います。

(児童)同じです。

（教師）ここまでで、速さを比べるには、時間をそろえ比べる方法と距離をそろえて比べる方法があるということが分かりましたね。

（教師）もう一度同じような問題をやってみましょう。１分で 60m 歩くＡさんと４分で 180m 歩くＢさんではどちらが速いでしょうか。２通りのやり方で比べてみましょう。



１度だけでは、理解できない児童も何人かはいるはずです。確実に理解させるために、類似問題をやるようにします。

（教師）さあ、どちらでしょうか。

(C9) Ａさんのほうが速いです。Ａさんは 60m 歩くのに１分だから、道のりを３倍すると 180m になります。同じ 180m になると、Ａさんは３分で歩けて、Ｂさんは４分かかかります。だからＡさんのほうが速いです。

(児童)同じです。

(C10)私は、時間を１分にそろえて比べました。Ａさんは１分で 60m 進むことは分かっています。Ｂさんは４分で 180m 進むので、１分あたりにするためには４で割ります。180÷4＝45 になるので、Ｂさんは１分で 45m 進みます。だから１分で 60m 進むＡさんが速いです。

(児童)同じです。

なるべく多くの児童に発言させたほうが良いので、１つの方法で発言を交代させます。

言葉での説明は難しいので、自信がなくて、挙手できない児童がいるはずです。「自分なりの言い方でいいのですよ。」とか「途中までででも良いのです。」とか、「誰かに相談してもよいです。」とか支援するための働きかけをしながら、「全員が挙手」できるまで待つことが大切です。

（教師）速さをくらべる方法ができましたね。どんなことが分かったか言葉で言ってみましょう。C11 さん。

(C11)時間を揃えて、同じ時間で進む距離を比べればいいと思います。

(児童)同じです。

(C12)C11 さんに付け足しで、距離をそろえて、同じ距離をどれだけの時間で進むか比べればいいと思います。

(児童)同じです。

（教師）速さをくらべる方法は、時間をそろえても距離を揃えてもできることが分かりました。これから速さの学習をしますが、時間をそろえて、どれだけ進むかという考え方で学習することになります。ほとんどの国ではそうしているからです。例えば、１時間で進む距離を表す場合、時速と言います。これは、１時間に揃えて比べるということです。

（教師）次の問題で、速さをくらべましょう。Ａさんは１分間で６０m 歩きます。Ｂさんは１分間で５０m 歩ます。Ｃさんは１分間で８０m 歩きます。だれが１番速いでしょうか。

(C13)Ｃさんです。

(児童)同じです。

（教師）１番遅いのはだれでしょうか。

(C14) Ｂさんです。　(児童) 同じです。

時間で揃えても、距離で揃えても、速さの比較はできるということを理解させた上で、これからは時間を揃えて速さを学習していくことを理解させます。このように段階を踏んでいくと、児童は進んで挙手して、主体的に学べるようになってきます。

ここで教師が確認している内容は、習得させたい知識なので、板書でも協調しておきます。

（教師）次の問題で、速さをくらべましょう。

「Ａの電車は１時間で１１０㎞進みます。Ｂの電車は１時間で９５㎞進みます。Ｃの電車は１時間で１０５㎞進みます。」どの電車が１番速いでしょうか。

(C15)Ａの電車です。

（教師）１番遅いのはどの電車でしょうか。

(C14)Ｂの電車です。(児童)同じです。

（教師）次の問題をノートにやって教師に見せましょう。計算もかいてください。Ａさんは２分間で１００m 歩きます。Ｂさんは３分間で１２０m 歩ます。Ｃさんは６分間で３３０m 歩きます。だれが１番速いでしょうか。１時間にそろえて比べましょう。

(児童)ノートにやって、教師に見せる。

（式）

Ａ	１００÷２＝５０	１分間で５０m
Ｂ	１２０÷３＝４０	１分間で４０m
Ｃ	３３０÷６＝５５	１分間で５５m

(答え)Ｃさんが１番速い

（教師）では、練習問題をやります。（定着の時間）

（教師が〇をつける）終わった子は、教える。〇つけ、自分の勉強をする。

（教師）振り返りをノートに書きましょう。

練習問題をさせる前に、もう一度、理解できているか確認します。これで全員挙手できれば、練習問題も全員ができるだろうと予想できます。

教師が〇つけをして、終わった子は、分からない子を教えます。教える子がいないときは、追加の課題を与えるか、その子が自分で判断して必要な学習をできるようにさせておきます。

第6章

質問コーナー

Q＆A

Q1：これまで授業で挙手していなかった児童の一部は、なかなか挙手しません。どうしたらよいでしょうか？

秘伝１に従って全員が挙手するのが当たり前、「間違ってもよい。」「間違ってもプラスになる。」と最初に根気よく伝えてきていると思います。それでもなかなか全員が挙手できないことがあるかと思います。そこで、発問した後、教師が挙手させるために待っている場面で、「まちがってもいいんですよ。」「とちゅうまででもいいんですよ。」とフォローする言葉をかけたり、「分かる人が助けてください。」と働きかけることが大切です。これを根気よく続けることで「全員挙手」につなげられます。

Q2：集中できない児童がいるとき、いちいち授業を止めていては、授業が進まないのではないでしょうか？

一人でも授業に集中していない児童がいるときは、見過ごさないで、授業を止めて、児童の前に行って、注意してから、授業を進めるのが基本です。新しい学級では、集中しなければいけないということを児童に徹底することが大切です。これに気がつかず、教師が学習を進めていくことを優先してしまうと、授業中に集中していなかったり、ふざけてしまったりする児童が徐々に増えてきます。そして、最悪の時は、学級崩壊にもつながります。最初は、時間がかかりますが、徹底すれば授業の効率化が図れて、短期間で学習が習得できる学級集団になるはずです。

Q3：相互指名をさせると、指名される児童に偏りが出てしまうときがあります、どうすればよいでしょうか？

相互指名は、児童に任せっぱなしではいけません。指名を全く児童に任せてしまっては、自然に指名される児童に偏りが出てきてしまいます。教師は、相互指名だからといって、児童に任せっぱなしにしてしまったら、相互指名のメリットがなくなってしまい、かえって教師が指名した方がよいとなってしまいます。「より多くの人が発言できるように指名してください。」とか「質問を優先してください。」とか「教師が子どもの立場で発言するときは、優先して指名してください。」とか、意識して働きかけをすることが必要です。相互指名は、児童が集団で学習を主体的に進めていく上で重要な手立てとなります。また、児童が互いを理解し合い、相互のかかわりを深めていく上でも機能していきます。児童が指名している時間に教師は別の活動をすることができるというメリットもあります。ぜひ相互指名を有効に活用できる教師になってほしいと思います。

Q4：児童の教え方が上手ではないので、教師が個別指導するべきではないでしょうか？

その場だけで考えれば、当然教師が教えた方が効果的です。しかし、集団で教える場合、教師が個別指導で対応できる能力には限界があります。長い目で見れば、児童に教え方を教える役割を教師がした方が、効果的になります。児童も教えることに慣れてきて教え方が上手になります。教わる側も、教わり方が上手になってきます。秘伝では、個別指導をするのではなく、教えたり教わったりできているか、教え方はどうか、教わり方はどうかを把握して、それらをより機能させていく指導をすることを大切にしています。また、前述してあるように、「教える・教わる」を通して、人とかかわることの良さや大切さを学ばせることもたいへん重要です。

Q＆A

Q5：「教える・教わる」側が一方的になってしまい、やる気をなくしませんでしょうか？

最初は、当然一方的になりますが、それを乗り越えると、逆転することも出てきます。根気よく教える側には、教えることの価値を伝えていくことです。また、みんなが学習に参加できるようになると、秘伝２の学習問題解決の話し合いの学習にたいへん深まりが出てきます。この点からも教える側にも利益があるわけです。

Q6：答えを教わらなければ手を挙げられない子もいます。それでもよいのでしょうか？

この問題には、必ずぶつかります。いくら授業のユニバーサルデザイン化といっても限界があります。どうしても理解できない子はいるはずです。だからと言って、挙手せずだまって座っているだけでは、その子の先はありません。答えを丸ごと教わって挙手して発言してもよいことにして、「挙手」して学習に参加させることが大切です。教師として目的をはっきりさせておくことが必要です。根気よく認めていくと習得力や理解力が向上して、自分で考えて発言できるようになるときが来るはずです。焦らず、教師として何か具体的にしたいと思う気持ちは尊いことですが、子ども達の助け合いを信じて待つことが大切です。

Q7：1時間で、いつも全員発言するような学習はむずかしいのですが？

「全員挙手」と全員発言は全く別なものと考えてください。秘伝１では、「全員挙手」が大切だと唱えています。秘伝の２の話し合いを中心とした学習では、全員が発言できるような問題解決のための話し合いを目指します。

Q8：簡単な発問で理解させても、教科書の練習問題に難しいものがあり躓いてしまう子もいるのですが？

特に算数では、この問題には直面します。学習指導で理解させた内容に即したプリントを予め作成しておくことをお薦めします。このプリントでは、内容を繰り返してさらに理解できるようにします。必ず満点をとれるようにしておき、自信をもたせるようにします。このプリントの丸付けは教師がして、終わったら教科書の練習問題に進むように段階を定めておくことが大切です。

Q9：発言するとき立ち上がって椅子の出し入れをすると、音が気になるのですが？

立ち上がってから、椅子をいちいち机の下に入れていると、音もしますし時間もかかりますので、椅子を入れないで発言させている教師の方が多いように思います。しつけの面からよくないと考えているときは、椅子をきちんと入れさせてから、発言させてもよいと思います。それぞれのメリットとデメリットから判断するとよいでしょう。

Q＆A

Q10：どうして、近くの人を当てるときも大きな声で言うのでしょうか？

この理由は、児童全員に理解させておくことが大切です。発言が終わって次の子を指名するとき、近くの席の子だからといって小さい声で指名した場合、当然聞こえなくて挙手し続けてしまう子がいるからです。このようなことが続くと挙手することがばかばかしくなってしまうと感じる子が出てくるかもしれません。挙手させる場面については、細心の注意を払うことが大切です。

Q11：習得の学習に話し合いの活動を入れないと、思考力の育成ができないのではないでしょうか？

学習にめりはりをつけることが大切です。秘伝の２の内容は、学習問題（課題）解決のための話し合いについてです。主に「習得」した知識や技能を「活用」する学習活動です。「習得」と「活用」の学習のバランスのよい学習計画を立てていくことも、教師としての大切な役割です。どちらの型の学習にしていくかは、学習内容を把握して、単元の構成をしながら決定していくことが望ましいと考えます。

Q12：習得した内容を確実に定着させるためには、どうすれば良いのでしょうか？

練習問題を繰り返すことが必要です。授業中にも何回か定着のための繰り返しの時間を設定することは、当然必要です。また、忘却曲線を踏まえると、家に帰ってからも、繰り返しが基本的には必要になります。家庭学習の習慣化を図ることも学習指導要領で求められていることです。継続的に習得のための家庭学習をさせて習慣化を図ることは不可欠です。ドリルは、一回で終わりではドリルの意味はありません。何度も繰り返すことが大切です。家でノートにやって、自分で丸付けをして、間違いは直すという自学自習の態度を習慣化していくことも必要です。

Q13：分からない子の座席の近くに教えられる子がいないときは、席替えをしたほうがよいでしょうか？

そのための席替えは、必要ありません。教えられる児童が席を立って教えに行ったり、分からない児童が席を立って教わりに行くことを当たり前の学級にしていくことが、先を考えた学級作りにつながります。すわってじっとしている学級では、主体的な学びは期待できません。

Q14：良い学級集団になっているかどうかの判断基準は、あるのでしょうか？

担任以外の教師がその学級の集団の前に立って、なにかを話そうとすれば、すぐによい集団になっているかどうかわかります。よい集団は、教師が働きかけなくても、雰囲気を察知して、話を聞こうと全員が話し手を向いて集中するからです。前に立った人は、自分を受け入れてくれていると強く感じるはずです。担任の教師がなんと言おうが、これ一つで判断できます。

また、誰かの発言が間違っていたときの周囲の態度が、その間違いを受け入れているかどうかフォローできているかどうかでも判断できます。

Q＆A

Q15：授業中の個別指導はどのようにしたらよいのでしょうか？

特別な場合を除いて、個別指導はする必要はありません。クラスの児童が分からない児童に教えたり、分からないとき教わりに行ったりできるようにする働きかけをしたり、望ましい教え方を教えたりすることです。「個別指導に追われてしまっては、人手が足りない、教師にも限界があると」という教師になってしまいます。先を考えて、教師は、教え方と教わり方を辛抱強く指導して学級に定着させていくことです。

Q16：教わること・教えることを嫌がる児童がいる場合どうすれば良いのでしょうか？

秘伝の根幹は、助け合いみんなが良くなることです。そのような児童がいるときは、絶対に投げ出さずに根気よく促すことです。注意してみていると、教わってもいいかなという場面や教えてみたいなという場面が必ず出てきます。例えば、計算問題等を一斉にさせて、終わったら先に教師が丸付けをして、全部できた子は、教師役で、丸付けか教える役割をさせることで、自然に教るようになるということもあります。教えた子がいやな思いをしないように、教わることに抵抗をもつ子には、特に留意して、繰り返し級友から教わることの大切さを、教えていきましょう。

Q17：自分の学習活動が終わってしまって、教える相手がいないときは何をさせればよいでしょうか？

主体的に学ぶことは、学習態度で最も大切なことです。そのときの自分にとって必要な学習を自分で判断して、進められる習慣をつけさせましょう。例えば，算数ドリルや漢字ドリル、作文、新聞 作りなどでが終わっていないところがあれば、やることを自分で判断して終わらせるなどです。

Q18：テスト等をさせているとき何をすればよいでしょうか？

テストはその場で処理することを原則にすると良いです。終わった児童から提出させて丸付けをします。提出した児童は返されるまで、自分で判断して、自分に必要な学習を進めさせます。丸付けが終わって、その記録が終わったテストから返していきます。１００点以外の児童は、その場で直して再提出させ、その時間内に丸を付けて返します。このようにして、４５分以内でテストの処理を終わらせるようにすることも、別の仕事を充実させることにつながります。テストの返却とテスト直しは、速ければ速いほど良いものです。高学年の漢字だけの問題が多いテストは、時間内でテスト直しまで終わらせるのはむずかしいことですが，それ以外のテストは慣れれば必ずできるはずです。

Q19：どうして子どもの発言を、教師が繰り返して言ってはよくないのですか？

児童が発言を互いに聴き合って、考えを深めていくことが基本です。発言は、相手に内容を分かりやすくすることや学級の全員に聞こえるようにすることはが原則です。児童の発言が伝わりにくい時、教師が代わって伝えてしまうと、発言する子の表現力が育たなくなってしまいます。また、教師の話のほうが聞きやすいので、児童が児童の発言に集中しなくなって、教師の話しか聴かなくなってしまうという、マイナス面があります。特別な子で発言ができない場合も、教師が手伝うのではなく、周囲の児童に手伝わせるようにすることが大切です。教師は、その手伝いができるように支援することが大切です。

秘伝１でめざす授業

秘伝１では、基礎的・基本的な知識や技能の確実な『習得』をめざした授業を実践しながら、全員が挙手して主体的に授業に参加できる集団づくりの方法について記述してきました。

学習目標の達成は当然大切ですが、秘伝における目標はそれだけではありません。学習時間の全ての時間が目標の達成と同様に人間関係作りも重視します。

授業の全ての時間通して、児童に人とのかかわり方を学ばせることを目指します。教え合いや助け合いの場面で、自然にそれがなされているかや、みんなから避けられたり無視されたりしている児童がいないかを、発見して、人間関係作りの指導を積み重ねていきます。

教える側がいつも一方的になってしまうなど問題点を感じる時期もあるかと思います。しかし、根気よく取り組み、教え方も教えていくことで、教わる側が教える側になるときが来るはずです。その時こそ、大きな喜びを感じることができるはずです。

毎日、毎時間が道徳や社会性を発達させていくための指導でもあります。

人間関係をより良くして、社会性を発達させていくことで、一人一人が自分を出すことができるようになり、力を十分発揮できるようになります。また、どんな子でも集団の中であたたかく受け入れられるようになります。

１年生から、人間関係作りを重視していくことで、揺るぎのない良い集団をつくり、どんな子が入ってきても、仲間として受け入れ、よりよい学や成長を促すことができるようにしていくことも目指します。

教師の秘伝シリーズ①～③

平成２７年１２月
川　崎　市　立　川　崎　小　学　校
著　者　　吉新　一之
表紙・本文デザイン　　森谷　一仁
協　力　　渡辺　研

教師の秘伝